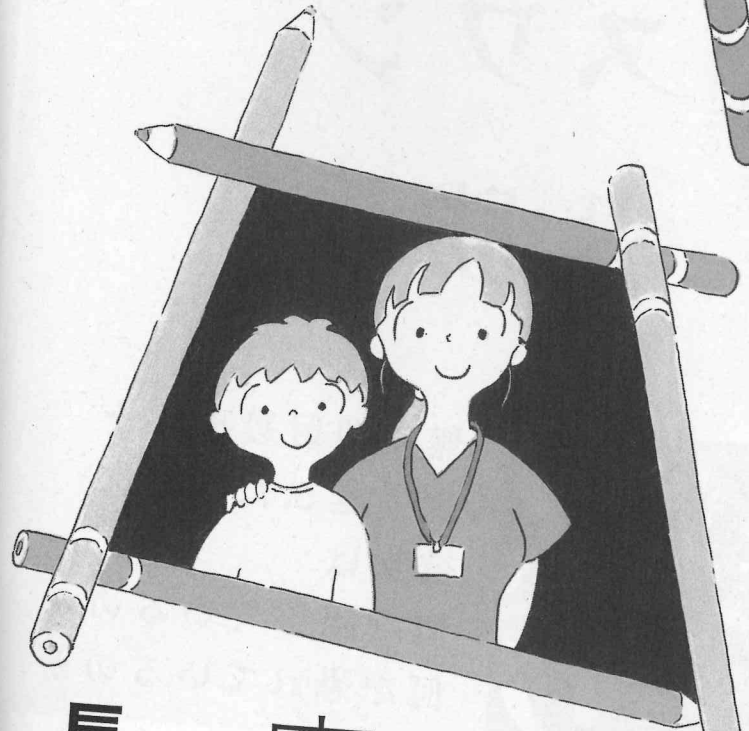


読切



デメンツ

昼夜逆転

家族

長尾和宏

特集
今こそ
医療小説を!

お父さんが、
どんどん違う人にな
って行く……
不安と葛藤にさいなまれ、
壊れそうになりながら、
それでも最後に行きつく、
家族のカタチ。

イラスト 早川世詩男

お母さんが、ちらし寿司を作った。なんでかわからないけれど、毎年この日のメニューはちらし寿司だと決まっている。今年は僕も手伝った。生まれて初めて、アナゴを包丁で切った。こんなに細長い魚だったなんてびっくりだ。「それにしてもお父さん遅いなあ。明日、お母さん早番だから、ちやちやつと食べて寝たいのにもう。あ、ご飯すつばいなあ……おばあちゃんが作ってたのと何が違うんやろ……」

そう言ってお母さんは、レンコンを切りかけのまな板の脇に置いていた缶チューハイをぐいっと飲んだ。最近、仕事から帰ってくるとすぐ冷蔵庫からお酒の缶を出して飲んでる。ぶはーっと、漫画の吹き出しみたいな声を出す。僕がコーラを飲むと怒るくせに。この前の11歳の誕生日のときは特別にコーラもカルピスソーダも飲み放題だったけど、いつもは歯が溶けるからダメだという。だけどお母さんのしゅわしゅわは、多少歯が溶けても、ストレスの方が自分にとってはダメージだから、リスクマネジメンツ的に仕方ないと言う。ストレスフルな病院に異動になったから、仕方ないのよと。

「嫌なことなんてない。最初は薄いつて感じてても、一週間も飲めば薄味がフツーになる」

そう言ってお父さんは、カボチャ味噌汁のねこまんまを無表情でかきこんだ。お父さんは、58歳で美術学校の講師を辞めて、今は新横浜の画材店でアルバイトをしている。時給が安すぎるとお母さんはときどきボヤいているけど、お父さんは気にしない。

「あとさあ。そのお母さんが買ったセーター？ それ、音符の模様でしょ？ お父さんに……似合っていないんじゃないかなあ」

お父さんはお腕を手を持ったまま、お腹のあたりをまじまじと見た。バイト先で、大学生の同僚に笑われているんじゃないかって想像するとイヤだった……いや、本当は、そのセーターのことを言いたいんじゃない。お父さんより28歳年下のお母さんが、無理して若くさせているのが、なんだかとてもモヤモヤする。

今、お母さんの勤めている老人病院は（正しくは、療養型病院というらしい）、横浜駅が最寄りだった。夜勤明け、昼に仕事が終わるときは駅前の高島屋デパートでお惣菜や菓子パンを買ってくる。それに加えて、バラ模様の紙袋を何個も抱えて帰ってくる日がある。その中にはお父さんや僕のために選んだ変な柄のシャツやセーターが入っている。お母さん

*

お母さんは看護師だ。だから病気のこととかストレスの話が大好きだ。一度食べたら三〇回嘔吐まで飲み込んだりやダメ。脂肪酸が原材料欄に書いてあるスナックはアトピーが悪化するから食べるな……最近僕は、イラッとする。これが反抗期つてやつなのか。お父さんだつてほんとうは、イラッとしてるに違いない。今年から味噌汁は薄味に。刺身を醤油にドボツとつけるのも禁止になった。そして何かにつけ、「還暦だからって年寄りくさいことはやめて。若々しくしてもらわないと困るのよ！」と怒っている。

お母さんが夜勤のときは、お父さんが夕食を作るのだけど、その味噌汁さえ薄くなった。この前のお父さんが作ったカボチャの味噌汁は、マジで寂しい味がした。

「あのさ、お父さん。イヤなものイヤつてお母さんに言っただほうがいいよ。病院が変わってから、お母さんのイライラ、やばくない？ あれ、ヒステリーってゆうやつじゃない？」

はいつも白衣だから、自分の服を買ってもつまらないと言つて。あるとき僕は、お母さんが爆買いしてくる日の「法則」に気が付いた。それは、担当の患者さんの「お看取り」のあった日だった。

お看取りがあった日は、帰ってくるなり惣菜パックと缶チューハイをセットすると、ソファーに倒れ込み、あくしんどつ！と大きなため息をつく。

僕はまだ死体を見たことがないけど、死んでいく人を見送ることは、看護師のお母さんでもしんどいらしい。だけど、今までだって、たくさん「お看取り」はあったはずなのに。

「はあ。前の病院じゃ、がんの患者さんばかりを見てたから知らなかったの。認知症になって、ごはんが食べられなくなつて、寝たきりになって、胃ろうになって死んでいくのつて、本当に可哀想だなあ！ 家族や親戚が、早く死ぬ死ねつて顔して待ってるの！ 今日亡くなったおばあさんの息子なんてさ、胃ろうでこんなにダラダラ生きるなんて、想定外でした。聞いてませんでした。やつと死んでくれたらつて、実の母親を目の前にして笑つたの。まだ身体があつたかいのによ？ ああ、私が死ぬとき、あなたにそんなこと言われたらどうしよう……可愛い光太が、そんなアホな息子になりませんように！」と僕の方を見て、拝むような仕草をする。

「……死んだら、聞こえないんじゃないの？」

「もう！……そういう話をしてるんじゃないの！」
「ねえ、最近お母さんがよく言うその、イロウってなんなの？」

「ああ、知らないよね。お年寄りが自分でごはんを食べられなくなつたときに、お腹のこのへんに穴あけて、そこからドロドロにしたごはんをブチューって入れるんだよ。今いる病院はね、そういうお年寄りばかりなの。認知症が進んで、本人が胃ろうをつけたいかどうかもわからないのに、勝手に穴をあけられることもあるの。ううん、そういうケースがほとんどかな」

「それ、美味しいの？ 美味しいかどうか舌でわかるんでしょ？ お腹じゃないよね？」

「やったことないからわかんないけど、たぶん、美味しくないと思う。お母さんはイヤだなあ。胃ろうをしてまでは生きていたくない。うん、自分だったら絶対やらない！」
「そう言つて眉を顰めるとお母さんは、買ってきたオムソバをつまみに2缶目の白桃サワーを開けた。イロウ。そんな言葉は、教室では誰も口にしない。おそらく同級生は誰も知らない言葉だ。」

そして僕は、この前の道徳の授業で習つたことを思い出した。

「自分がやつてほしくないことを、他人にやつては、いけま

い！」

お母さんとはときどき、自分にわかんないことを僕が訊くと、「疲れてる！」って叫び出す。もしくは、「アイ」って言葉で終わりにする。これも最近僕が発見した法則。そうそう、女子は、「アイ」って言葉が好きなんだって。お母さんも女子だから仕方ないか。

お母さんの夜勤日、晩ごはんを食べながらお父さんにその法則について話したら、「そういう話はしないほうがいい」と静かに言われた。その日の味噌汁も、格別にまずかった。薄いつか、もはやそういう問題じゃなく、何かを入れ忘れていて、代わりにとつてもないものが入っている味がした。それにハンバーグは生焼けで気持ち悪かった。お父さんの料理がここところ、急激に下手になっていって気がする。

「お母さんは、誰かが死ぬことが、怖いんだからさ。そういうところは17歳のまんまなんだ」

「……だつてお母さん、もう30代じゃん。看護師じゃん。それに、人が死ぬと何を何回も見てるんでしょ？ 病院で。あと、その震災のときに……」

するとお父さんはすつくと席を立ち、寝室に行つてガガゴソやつていたかと思うと、一冊のスケッチブックを持ってきて僕に手渡した。表紙がボロボロで、画用紙は黄ばんでいる。表紙には立花芳野と結婚前のお母さんの名前があった。

せん

「……お母さんは、自分が絶対にしてほしくないことを、患者さんにしているの……？」

「は？」指のソースを舐めながらお母さんは僕を見た。ソファの上で胡坐をかいている。

「だつて今、そう言つたじゃん？」

「……家族は生きてほしいと思うよ？ たとえ寝たきりになっても、一秒でもいいから、長く生きてほしいって。それが愛なんだよ？」

「アイつて？」

「愛、だよ？ うわ。そういう気持ちわかんないかな？ わ。どうしよう！ 光太が人の気持ち理解できないアスペルガーだったら……。最近多いんだよね、そういう子ども！

胃ろうをしてでも長生きしてほしいと思うのは、家族にとつては当たり前感情でもあるの。それをドクターやナースが否定する権利は、ないんだよ」

「でも、お母さんはそんなとき、胃ろうはイヤなんですよ？ それを僕が無理矢理やることは、愛なの？ 僕はやつたほうがいいの？ やらないほうがいいの？」

情を知っているプロだから……つてああ！ もう！ お母さん疲れているの！ 宿題は？ オムソバ食べたなら勉強しなさい

「これ、横浜の海？」

「違う。神戸の海だ。お母さんが、あの地震で両親を失つた直後に言葉が出なくなつたとき、お父さんは、お母さんに絵を教えていたことがある。いや、教えるというか見守つていただけかなあ」

「知ってるよ。それで出会つたんでしょ？」

「そう。地震で倒壊したお母さんの家は高台にあって、神戸の海が見えた。その海ばかり、思い出して絵に描いていた時期があった」

「海なのに、ぜんぶオレンジ色なんだね」

山あいのぞくピンクがかつたオレンジの海。空の青にもオレンジが混ざっている。きれいな色だけど、見ているだけで寂しくなつた。

「震災の直前、夜明けの空が紫になって海との境目がわからなくなつたつてお母さんは言うんだ。そこから先はまったく覚えてないって。だから紫とか暗い青い絵具は使えない。きつと今でも、使えないんだ。それはお母さんにとって、死の色なんだ。……芳野ちゃん、可哀想だなあ」

お父さんは、誰に言うでもなくしみじみとそう呟いた。昔は、芳野ちゃんと呼んでいたのか……お母さんの昔のスケッチブックを初めて見た。空と海ばかりで人は出てこない。どの風景も、昼なのか夜なのかわからない。

お父さんの絵なら、リビングにも寝室にも、トイレにもある。まだ幼い僕を、お母さんが両手で抱きあげている絵。そのとき、スケッチブックの間からパラパラと数枚の紙が落ちた。慌てて拾うと、便せんだった。古ぼけたピンクの便せん。いいものかどうか戸惑った。「読んで……いい？」。隣で一緒にスケッチブックを見ていたお父さんの顔を見上げる。お父さんは、しばらく考えてから、頷いた。僕は二人一緒に、その便せんを声に出さずに読み始めた。

〔啓啓 お元気ですか。あの日からもう一年と二カ月が経ちました。〕

明日は、高校の卒業式です。おばあちゃんが、明石の魚棚から鯛のおかしら付きを買ってくるってゆうてます。鯛を焼いて、ちらし寿司も、あの日以来初めて作るとはりきっていい好物だったからって。「パパの好きな穴子もぎょうさん入れる」って。よかったね、パパ。
生田川公園の桜がもうすぐ咲きそうなので、昨日は桜の絵を描きました。

前も書いたかもしれませんが、昨年の秋から絵を習っています。おじいちゃんが、絵を描くことが、きつと芳野の心を

上だから。五十男が女子高生に手をつけるなんて犯罪や、訴えてやると、おじいちゃんは怒ってます。あの絵の先生のおかげで芳野が立ち直ってくれた、と感謝していたのに。

それに、信太さんは五十男やない。まだ46歳です！ 50と46は全然違う。信太さんは、ママの大好きな奥田瑛二と同じ歳や！ おばあちゃんは、そんなに歳が離れてたら、旦那さんにすぐに死なれてしまう。またおまえが泣くのはつらいって泣きます。

でも、私は絶対に信太さんを死なせません。絶対に。看護師になれたら、みんなの健康を管理して、そして早く子供を産んで、誰も死なないで、ずっと生きてる家族を作りたい。だから、私の結婚を応援してください。

1996年春

天国のパパとママへ

芳野より

追伸 尼崎の夕焼けの絵を同封します。〕

手紙を読み終えた僕は、ぎゅーって、お腹を撫まれているような気持ちになって、そのあと急に、涙が出そうになって、僕は必死で、涙を引つ込めようと頑張った。泣きそうな自分を、お父さんに知られたくなくて、僕は、ちょっとした外れなことをお父さんに訊いてしまった。

癒すからって。神戸の芸大の先生がやっている教室です。ここに通ってから少しづつ、言葉が出るようになったとおじいちゃんも大喜びです。おばあちゃんが丸で、48色絵具セットを買ってくれました。だけど信太さん、あ、信太さんは栗原信太郎といって、絵の先生のことです。信太さんは、絵の具は12色で十分だといいました。

12色あれば無限に色が作れる。どんな色も好きに作れるからって。

「最小限が、無限大を作るには、一番ふさわしい」って。パパとママとの時間は、17年で終わっちゃいました。でも、信太さんの話を聞いて、「17年で短すぎるけど、パパとママとの幸せな時間は無限大だった」と思えるようになりました。

嘘。嘘です。そんなん思えない。

12色で幸せな色を作ろうと思っても、あの日の朝の、紫色の空がパレットの上に蘇って怖くて体が震えます。

さてわたしは4月から、看護師学校へ行きます。それで二十歳になったら、結婚もします。相手は信太さんです。それでお父さんのお母さんは10年前に亡くなり、老人ホームに入っている顔合わせは、そっちで勝手にやってください。なので両親のだけど、困ったことがあります。おじいちゃんもおばあちゃんも、わたしの結婚に反対です。信太さんが、私より28歳

「……お父さん、最近、絵を描かなくなつたね」

お父さんは答えなかった。聞こえなかつたのかもかもしれないけど。そしてお父さんは、食べかけだったことを思い出したように、急に食卓に向き直り生焼けのハンバーグにぶすつと箸を突き刺して持ち上げると、ごはんの上のつけた。むしやむしや食べた。白いごはんがみるみる肉の血で染まっていたのを見て僕は食欲を失い、残してしまつた。

その夜、僕はなかなか眠れずいた。オレンジ色の海。誰も死なないで、ずっと生きている家族を作りたいと、昔のお母さんが書いたピンクの便せん。そして、白いごはんに沁みだした血色の生焼けハンバーグ。目を閉じると、いろんな色が混ざり合う。眠るのをあきらめて、ベッドから起き上がった。

お母さんは今ごろ病院で、誰かのお看取りをしているのかな。午前3時30分。今まで起きたことがない時間帯だ。知らない時間に起き上がるのは、ちよつと怖い。でも、空腹には勝てなくて、僕はキッチンに行くことにした。冷凍庫には、お母さんが買いだめしておいた冷凍食品がたくさんある。焼きおにぎりなら、2分チンすれば食べられるはず……隣の部屋で眠っているお父さんを起ささないように爪先立ちでキッチンに行き、電気をつける。うわわわ！

「誰だおまえは！」寝てると思つていたお父さんがキッチンにいた。

何か、どこかが、いつものお父さんと違う。冷蔵庫の扉が開いていて、マヨネーズとかワサビが床に落ちている。僕は足が震えた。知らない男の人に会ったようで。お父さんは、僕の顔を見てしばらく、きよろきよろと目を動かした。それから、「絵具を探していたんだ」とぼそつと言った。

「絵具？　なんで？」　「もうすぐ芳野ちゃんが、絵を描きに来るから……」　でもすぐに、お父さんは「間違えた」という顔をして、「なんでもない」と、床に落ちた物を冷蔵庫にしまいはじめた。しゃがんで立ち、立ってはいしち「ええと、これはなんだ？　上の棚だったかな」などと言いながら時間をかけて冷蔵庫の棚に戻すお父さんのことを、見ているはいけなげな気がして、夜明け前の窓辺に目をやった。絵具。芳野ちゃん。オレンジ色の空と海。青い絵具は使えない芳野ちゃん。

急に僕は、心臓のあたりがきゅんと絞られているような、今まで経験したことのない変な感じを胸に覚えた。お母さんなら、ここで怒るかもしれない。でも僕は……お父さんの言葉をちゃんと聞こうと思う。「お父さん。絵具は、僕の部屋にあるよ。なんなら、持ってくる？」

「あ、ああ、そうだったな。冷蔵庫にあるわけがないわな。」

光太、出てあげて！
玄関モニターに映っていたのは、お父さんではなく、いかつい制服を着た警察官だった。

「ハイカイ、ですか……」。玄関先でお母さんは呆然としていた。

ハイカイって、なんだ？　またわからない言葉が出てきた。イロウの仲間？　いや、違うか。お巡りさんのお兄さんは少

だけ微笑んだ。こういう場面は慣れっこだという微笑みだ。「いえ、徘徊という言葉はアレですが……失礼ですが、信太朗さんの奥様は……？」

「私が信太朗の妻です」お母さんも、その質問には慣れっこだ。お巡りさんはそのときだけ、一瞬驚きを隠さなかった。そして、僕のことをまじまじと見た。

「息子です。小5です。私は看護師をやっております。家族の健康については、普段からよく話し合っています。ですから息子も一緒に話を聞きます」

お巡りさんは僕にも薄く微笑んだ。「わかりました。信太朗さんは、お勤め先から横浜線を逆方向に乗られたようです。おそらく石川町で降りられた。喉が渴いたのでしょう。外人墓地近くのコンビニで缶コーヒータを取り出し、レジに寄らず立ち去ろうとしました」

いや、今はいい。それよりも、晩メシがまだだった。何か作るか？

お父さんの声は、少し落ち着きを取り戻した。「えっ？　うん。じゃあ、あ、この冷凍庫にあるお好み焼きをチンしようよ」

「いいねえ。じゃあ、目玉焼きをのせよう」僕らはその日、日の出を見ながら、二人で目玉焼きを作った。ベランダ越しの空は、紫色からたちまちオレンジ色になった。こんな時間にお好み焼きを食べたなんて知ったら、お母さんは怒るだろう。だから、お父さんと僕の秘密だ。

*

「もう！　携帯切れてる！　どこかで飲んでるなあ。もう！　今日は大事な日やのに！」

ちらし寿司を食べながら、お母さんは何度もお父さんの携帯に電話をかけている。ニュース番組では、あの日から15年ということで阪神淡路

大震災の映像を流していた。この景色の中に15年前のお母さんとお父さんがいたなんて信じられない。神戸港が映し出されたとき、マンシヨンのインターホンが鳴った。

「お父さん、酔っぱらって鍵が見当たらないんだよ、きつと。」

「夫が万引きを？」
お母さんが震える声でそう言うと、お巡りさんの横で下を向いていたお父さんが急に、お母さんを睨みつける。そして、聞き取れないくらい小さな声で「違う」と言った。その声に

気づいてほしくて、僕はお母さんの手を握った。お母さんの手はものすごく冷たかった。万引きって、不良の高校生とか

がするものでしょ、お父さんは不良じゃないから違う、と僕は言いたかったんだけど……。

「ええ、まあ。目撃した店員さんと探めていたところに、パトロール中の私が通りかかっています。どうもお話が混乱されています。神戸のサンノミヤヒガシなんとかに行く途中だと

仰おっしゃつて。一旦交番まで同行をお願いしたので、身元確認ができましたので……お連れした次第です。でも、今は、しっかりとられています。財布をポケットに入れたまま上着を紛失されたようで……」

お父さんは震えていた。音符のセーターはどころ汚れていた。俺はコーヒータを飲みたかっただけだとブツブツ言っている。お母さんは、泣きそうな顔をしていた。

「そこまでとは……そろそろ脳の検査をと思っていたところ

です！　私が看護師をやっておりますのに、お恥ずかしい。でも、徘徊や万引きまでするほどとは……すみません！」

叫ぶようにして頭を下げた。

「いえ、ですから、今はしつかりされていますし、少しお疲れだっただけでしよう」
そう言っ、お巡りさんはポンポン、と僕の頭を軽く撫で

てからドアを閉めた。お母さんは、張りつめていた糸が切れように泣き始めた。ひどいよう、こんなひどいよう、こんな未来、誰も教えてくれなかったよううと。「おい、女の子のか？」とお父さんがその肩に手をやると、「おい、大丈夫よ！」とその手をはねのけた。お父さんはびくくりして、三和土に後ずさった。お母さんも、自分が発した言葉に自分で驚いているようだった。そして、小さく「ごめん」と呟いた後で、別人のように叫びだした。

「もう、何やってんのよ！ パトカーがマンションの前に停まったらどう思われるか！」
「俺は芳野ちゃんのことを捜していたんだ！ それなのに警察にしょっぱかれて！」
そこまて言うとお父さんは、ハツと真顔になって、そのま

ま寢室に行きドアをしめた。まもなく大きな軒が聞こえてきた。お母さんは、ちよつと頭冷やしてくると、しばらく帰ってこなかった。

僕は一人で残りのちらし寿司を食べた。お母さんは「酔を入れすぎた」と言っていたけど、僕にはまったく味がしな

さんはひどく疲れていて、お巡りさんに連れてこられた夜みたいにならふらで、着替えもせずにベッドに倒れ込んだ。「もう！ 歯ぐらい磨いてよ！」とお母さんが大きなため息をつく。

まもなくゴオーゴオーと嵐のような軒が聞こえてくると、お母さんは、僕をソファーに呼んだ。僕には、だいたい察しが付いた。お父さんは、ニンチつてやつだ。

クラスで隣席の金子カオルが、この前の給食の時間に話していた。カオルにひな人形を買ってくれたおばあちゃんはこの最近、散歩に行つては、お巡りさんに連れられて帰ってくるという。ハイカイが増えたから施設に入れるしかないって。わたしはおばあちゃんと一緒にいたい、でもお母さんは警察のやつかいになるのもうごめんだって……泣きそうだった。

カオルがハイカイという言葉を知っていたことに、僕は衝撃を受けた。

「警察のやつかいになるってことは……もしかしたら、ハイカイって犯罪？」

「そうだよねえ。おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に住んでないと、知らないよねえ」

カオルは学級委員だけあって、ときどき上から目線だ。ちよつとお母さんに似てる。

った。それどころか、玉子焼きやグリーンピースや海老の色もわからなかった。家の中が、灰色一色に見えた。

2月の終わりの日。お父さんは画材店のアルバイトを辞めた。正確に言えば、お母さんに辞めさせられた。センベツにとお店から高級絵具の箱が届いた。72色セットだ。僕にとつては初めて見る色ばかりだ。こんなに色があつたら、なんだつて描けるだろう！ お父さんと横浜の港まで絵を描きに行くのもいい。そうだ、みなとみらいにある大きな観覧車も、一個一個のゴンドラを違う色で描くことができると回っている。しかし、お父さんは興味なさげに絵具を僕にくれた。

その夜中。目を覚ますと、隣の部屋からは、呪文のようなお母さんとお父さんの声が聞こえた。僕はそつと、壁に耳をあてた。「さくら ねこ でんしゃ。違う、逆さからや！ もう一度。さくら ねこ でんしゃ……」「うるさい！ もい加減にせえ、なんでそんなことせにやあかんの……夫婦ゲンカ？ そんなの、今までなかったのに。」

ひな祭りが終わつてすぐ、お母さんはお父さんを連れて、朝早く東京の大病院に行った。夕方に帰つてくると、お父

「ハイカイはね、犯罪じゃないよ。認知症の症状のひとつだつて、ママが言つてたから。お散歩して、自分がどこにいるかわからなくなつちゃうだけだよ」

「なんでそれで、警察になるの？」

「おばあちゃんの場合、いつも誰かに通報されてるんだよね。帰り道がわからなかったり、ここはどこですか？ つて道を尋ねただけで、110番しちゃう人がいっぱいいるの」

「じゃあ、おばあちゃんが悪いわけじゃないか？」

「おばあちゃんは悪くないよ。散歩してただけだもん。それに、警察って悪い人を追いかけるだけが仕事じゃないでしょ。困っている市民を助けることが本来の仕事よ。おばあちゃんを送り届けてくれることも仕事の一環なのにさあ、ママは恥ずかしいつて。やんなつちゃう、ママ」

カオルのお父さんは、たしか弁護士さんだ。さすが、名門私立中学を目指しているヤツは、言うことが違うなあ……今のカオルの意見を、お母さんに伝えるべきか。でも、どう話せばいいのかわからずにいると、お母さんは缶チューハイを開け、僕の目を見ずに一気に切り出した。

「お父さん、若年性アルツハイマー型認知症だつて。中等度の。若年性は若い人つてこと」

「ちゆうとうどつて何？」

「軽すぎず重すぎずつていうか……何を間違えたのかな。な

んでこんなになるまで、気がつかなかったらどう！ 光太は、お母さんが夜勤のときとか、お父さんが変とは思わなかった？」

「ん……べつに。ふつう」

「男の子はのんきでいいなあ！ ねえ、このこと先生にも友達にも、言ったらダメだよ。仕事を辞めたことも、誰にも言っちゃだめ。尼崎のおばあちゃんから電話があつても……」

「なんで？」

「なんであつて、光太のために言つてるのに！ お父さんが「デメンツ」だなんて、小学生で、恥ずかしいでしょう？ せめてあなたが高校生になるまでは大きな声で言わないでね」

お母さんが、なんで恥ずかしいのか僕にはわからない。だつて、そのデメンツなつかつていうのは病気の名前だ。病気になるのが恥ずかしいってどういふことだ？ いずれ歳をとれば、誰でもなることなんじゃないのか？ お母さんだつて、そう、僕だつて……。

寝室から容赦なく聞こえてくる野の音を断ち切るように、お母さんはテレビをつけた。

ニュースでは、この前起きた南米チリの大地震についてやっていた。都市では略奪や放火が相次いで急激に治安が悪化、夜間に散歩することが禁止されたと言っている。じゃあチリで

「そりやそうよ。認知症だつて診断されたら、誰だつて不安になるでしょう？」

でも……。僕には、お母さんのほうが不安で壊れそうに思えてならない。

「あと、こつちは睡眠薬。これは眠れないときにね。昼夜逆転が起らないようにするの。昼夜逆転が起きると、夜中に暴れ出すの。お母さんが勤めている病院でも、患者さんの多くは昼夜逆転するから、お母さんたち看護師は、ホントに大変でさ……それと、こつちは便秘薬で……」

「チュウヤギヤクテンつて、何？」

「ん？ それくらい考えればわかるでしょ？ チュウヤつて昼と夜つて書くの。昼と夜が逆転しちゃうことよ。昼と夜が逆転して、夜に眠れない人たちつてことよ」

「……それつて、お母さんのことじゃん。夜勤明けのお母さんだよ。この不安のお薬と睡眠薬、お母さんが飲んだほうがいいよ。お父さんじゃなくてさ！」

お母さんは、いつついつも、自分が正しいつて思っている。でも、夜勤明けの寝不足のお母さんは、けっこういろいろなことを間違える。昼と夜。起きている時間を間違えると、いろんなことが狂つていくのかも知れない。不安だから、人は間違えるのかな？ それとも、間違えるから人は不安になるのかな？ 僕がそう言つと、急にお母さんの目が滲んで、

今、ハイカイしている人はどうなつちゃうんだろう、と僕はぼんやり地球の裏側のニンチの人を思った。

「ちよつと！ 光太、聞いている？ お父さんにはまだまだシツカリしてもらわないと困るの。だから、光太。お母さんがいないとき、この薬の管理をお願い。お父さんが飲み忘れていたら、絶対に飲んでもらつて。いい？ これ、お薬カレンダー！ お薬手帳もここに入れるから！」

いつの間にか、リビングの壁には大きな透明なポケットがたくさんついた壁掛けがかけられていた。横に四つ。あさ・水と曜日ごとに七段あつた。そこは、昨日までお父さんの絵がかけてられていた場所だつた。いい？ ちゃんと聞いて、とお母さんは片手で髪を耳にかけると、急に看護師さんの顔になつた。

「お父さんの頭のなかの細胞が、少しずつ死に始めている。アセチルコリンつていう物質が出なくなつてるのよ。それを増やすのがこのお薬なの。塩酸ドネペジル。別に名前は覚えなくていい。10年前にできた特効薬で、いま、認知症には世界中でこのお薬しかないの。これが一番大事。それから、こお父さんの不安な気持ちを和らげる作用があるの」

「お父さん、不安なの？」

涙がぼろぼろとこぼれだした。

「光太……ママだつて不安だよ。不安で粉々になりそうだよ。お父さんは……信太さんは、ずっとずっと、ママのこと守つてくれるつて言つた。だから結婚したのに！ 嘘だつた。嘘つきだつた。誰も守つてくれへん……お母さん、そんなに強い人じゃないよう」

ちつちやな女の子みたいに嗚咽した。僕はもう何も言えなかつた。

それにしても……お父さんはこれから、毎日こんなに薬を飲まないといけないのか。お父さんは、薬が嫌いだといふのに。読めない漢字がたくさんあつたが、一番大事な薬だといふ塩酸ドネペジルの「注意書き」という紙を読んでみた。視力2・0はないと読めないような小さな字でぎつしり書かれていて、子どもの僕だつてしんどい。こんな小さい字、年寄りには読めないよなあ。

（塩酸ドネペジル。主な副作用は、消化器症状の食欲不振、吐き気、嘔吐で、下痢、腹痛などもあります。重大な副作用には、以下のものが報告されております。●失神、徐脈、心筋梗塞、心不全…気を失う、脈が少ない、胸の痛み、息苦しい、むくみ、●消化性潰瘍…胃痛、下血（黒いタール状の血液便）・吐血（コーヒー色のものを吐く）、●肝臓の重い症状

…だるい、食欲不振、吐き気、発熱・発疹、かゆみ、皮膚や
白目が黄色くなる、尿が褐色、●脳性発作、脳出血、脳血管
障害…けいれん、激しい頭痛・錐体外路障害…手足のふるえ
もつれ、口周辺がもぐもぐ動く、●悪性症候群(Syndrome
main)：急激な体温上昇、筋肉のこわばり、体の硬直、発汗
びれ、けいれん、手足に力が入らない、横紋筋融解症…手足のし
赤褐色の尿、●呼吸困難…息が苦しい、●肺炎…上腹部背
中の強い痛み、吐き気、吐く、●腎不全…だるい、吐き気、
むくみ、尿の濁り、血尿、尿が少ない・出ない…それか
らそれから。読んでいるうちにチリ地震のニュースの後にや
っていた、AKB48の歌が終わってしまった。

お父さんは、翌日からまじめに薬を飲み始めた。お薬カレ
ンダーのポケットを1個ずつ空にしていくのが、我が家の最
重要課題だとお母さんは言った。夕方、僕が学校から帰って
くと、一緒に散歩をするようになった。
春休みに入ったある日の朝、お父さんは、ふいに僕を誘っ
た。山下公園まで行って、氷川丸に乗ろうという。氷川丸は、
太平洋を横断したこともある歴史ある船だ。太平洋戦争中は、
海軍の病院船として利用された。船が病院だったなんて、ち

よつと想像つかない。停泊しているとはいえ、そんなスゴい
船に乗れるのは楽しい。僕がもつと小さかった頃、お父さん
はときどき、ここに僕を連れて来てくれた。赤レンガ倉庫で
一日絵を描いていたこともある……。
だけとお父さんは、その前に寄りたいところがあるという、
石川町を通り過ぎ、港南台駅で降りた。そこからタクシーに
乗り、お父さんは運転手さんに、(虹と海の見える里)と告
げた。素敵な名前に、僕はワクワクした。もしかして、新し
いテーマパーク？ だけとお父さんは、そんな僕の顔を残念
そうに見た。
「光太、ごめん。今から行くのは老人ホームや。お父さん
の大学時代の恩師がおるはずや。神戸にいたお父さんを、こ
ちの美術学校に呼んでくれた人や。二年前からこの施設に
おることはわかってたんや……そやけど、なんか怖くてな、
一度も面会に来たことないねん。そやけど、なんか怖くてな、
知症が進んだら、もう来れへんかもしれへん……だから一度、
会ってきたくてな……」
お父さんはこの頃、関西弁が多くなった。
そしてこの時初めて、お父さんの口から自分が認知症であ
ると聞いた。僕は黙って鎮くしかなかった。認知症は、いろ
いろ忘れる病気だって聞いた。だったら、病気だってことを
忘れちゃえばいいのに。そうすれば、お父さんはいつもと変

わらぬお父さんに戻れるんじゃないのか。
タクシーは小高い丘を登ると、十五分くらいでその施設に
ついた。クリーム色の建物は普通のマンションのような見た
目だったけど、何かが普通じゃない。

ベランダの柵がやけに高い。やたらと監視カメラがついて
いる。二重の鍵を中から開けてもらうと、ツンとする匂いに
思わずむせた。これは、お母さんの体からときどき漂ってく
る匂いと同じだと気付くまでしばらくかかった。消毒薬だ。
ロビーのような場所では、「森のくまさん」がかかっている、
車いすの数人のお年寄りが、後ろから無理矢理腕を上げたり
下げたりさせられている。

お父さんの恩師という人は、ベッドに縛られていた。
ガリガリに痩せたお爺さんだった。夜中に暴れ出すから仕方
なく縛っているんですと、スタッフの男の人がマスクの下か
ら言った。何度もベランダから脱走しようとして困り果てま
してね。今は、睡眠薬で眠らせていますがね。まあ、ニンチ
が進むと昼夜逆転して夜中暴れるのはよくある話で。起こし
ましようか？「起きてください！ お友達が来てますよ！」
そう言つて、バシッバシッと、お爺ちゃんの頬を叩く。
チュウヤギャクテン。お母さんの声が、僕の耳元でこだま
する。

「やめろや！」お父さんが関西風にすごんだ。「いや、これ

くらい叩かないと」「やめろや。僕の大切な人や。叩く
な！」お父さんが大きな声を出したそのとき、お爺さんが目
を開いた。その目は起きていたけど、寝ていた。昔飼ってい
た金魚が、酸素が足りなくなつて水面上がってきたときの
目に似ていた。僕のこと、お父さんのことも、見えていな
いみたいだった。
スタッフの人が部屋を出て行くとお父さんは無言で、お爺
さんの手を握り、そのブラックホールみたいな瞳を見ていた。
僕はどこを向いていいかわからなくて、キョロキョロした。
そして、壁のお薬カレンダーを見た。お父さんが飲んでい
ると同じ薬がある。急に怖くなって、足が震えてきた。トイ
レに行きたくなつたけど、この消毒薬の匂いの中では、オシ
ッコが出そうにない。
「お父さん、もう帰ろう」僕の声で、お父さんは、お爺さん
の手を離し、次にパジャマのボタンを何個かはずした。お腹
には穴があいていて、プラスチックのキャップがされている。
「もっかい三宮で吞みたかったなあ」お父さんはそう言つて、
穴の周りを撫でた。……これが、胃ろうつてやつか？ どう
して、年を取ると、若い人に叩かれたり、お腹に穴をあけた
りされるのだろう。

氷川丸の中でお父さんはずっと無言だった。みなとみらい

の観覧車に乗ろうよ、と誘ったのは僕だった。観覧車がてっぺん近くに来たとき、ようやくお父さんは声を出した。

「光太。もしな、認知症が進んで、あの人みたいに縛られるようになったら、お母さんやお前のことを忘れてしまったら……俺を、殺してくれへんか」

「……お父さんは、あんなふうにならない」

「いや、いずれなるんや。あんな、外国にはな、安楽死つちゆうもんがある。ゴッホの生まれた国、なんやつたかな……あかん。そんなことも思い出せへん。でもそこでは、認知症の人が、安楽死できる。欧米でやることは、この国はなんでも真似したがるから、いずれ日本でも安楽死ができるようになるはずや。そんなときに、お父さんを安楽死させてくれ……」

太陽が、沈もうとしていた。

アンラクシ？ お父さん、死にたがっている？ お父さんが、死ぬ？ 嘘だやめろ。

「僕、そんなのわかんないよ……」

「医者から毒薬もらってな、静かにあの世に逝くことや」

海は、悲しいオレンジ色をしていた。お母さんのスケッチブックみたいに。でも、何もかもがぼんやり滲んで見えるのは、なんだろう。

観覧車が一番てっぺんに来た時に、涙があふれだした。死

なないでよ、死ぬとか、殺すとか、言わないでよ。死んじややだよ……お父さん、死なないでよう。ごめん、ごめんな、許してくれ、光太。お父さん、やだよ、死ぬなよう。泣き止まない僕をお父さんの太い腕が、きつく抱きしめた。いつまでもお父さんと二人、この観覧車に揺られて昼も夜もぐるぐるできたらしいのに。横浜は星月夜になっていた。

*

小学校最後の一年間、僕の思い出は、学校より家族のことばかりだった。

お父さんの薬は徐々に増やされた。それと比例するようにお父さんの言葉が減っていった。無表情でぼうつとしていてと思っただけもなく急に怒り出す。歩き方もトボトボだ。食事をしない。たった3ヶ月で激瘦せした。料理を作ることもなく、昼夜逆転している。

一方、お母さんはお酒の量が増えて少し太った。本人曰く、太ったのは宅配ピザとお酒のせいではなくてストレスのせいらしい。お母さんは介護認定について悩んでいた。お父さんも、若年性のお父さんは馴染めないだろうという。そして蟬の声が聞こえてきた頃、お父さんは、薬を飲むの

を拒否するようになった。

夏休み。自由研究に僕は「クスリりの歴史」を選んだ。昼下がりにお父さんと町の図書館まで歩いて行き、クスリりの本を探した。どの本にも、「毒と薬は紙一重」と書いてあった。

「お父さん、カミヒトエって何？」隣で、カラバツジヨの画集を見ていたお父さんに話しかける。

「カミヒトエ？ ああ、あれやろ。バカと天才は紙一重ちゅうやつや」

「バカと天才？ 違うよ、毒と薬って書いてあるよ」

「そうか。まあ、似たようなもんや。お父さんは、最近アホになったらしいから、もしかしたら、天才的なスゴい絵が描けるようになるかもしれないな。こんなの」と、死にそうなる聖母マリアの絵を僕に見せた。なんだかおかしくて、二人して笑いころげていたら、図書館の人に怒られた。最近、薬をやめてからお父さんの笑顔が増えて、歩き方も食欲も戻り元気になってきた。

だけとお母さんは、病院の薬剤師さんに相談したらしく、挿り鉢を食器棚の奥から探し出した。そして、塩酸ドネペジルの白い錠剤を何錠も挿り鉢の底に転がすと、ゴマを播るようにしてギコギコと粉にした。

「光太、お願い。これをお味噌汁とかヨーグルトに混ぜて。なんとかごまかして飲ませるの」

「ごまかす？ それって、ダマシじゃん。僕イヤだよ、そんなことするの」

夏休みなのに、どこにも旅行できない苛立ちも手伝って、ついでにお母さんにつつかかった。この半年くらいで僕の身長は急に伸びて156センチのお母さんの背を抜いた。少し声も掠れはじめた。けれどお母さんは、気づかない。冷蔵庫に並ぶ缶チューハイのアルコール度数は5%から7%、いつのまにか9%に変わっていたけど、きつとそれにも気づいていない。お母さんが気にかけているのは、お薬カレンダーだけだ。

もう、ダメだ。僕は限界だった。

「お母さん、いつも何を見てるんだよ？ どこに向かってしゃべってるんだよ？ なんでさ、この前、お父さんの病気が恥ずかしいとか言ったわけ？ 僕は恥ずかしくなんかないよ！ お母さん、恥ずかしいと思うから、お父さんに無理に薬を飲ませてるんだろ？」

ギコギコギコ……。お母さんは、僕の声をかき消すようにして、白い薬を潰し続ける。ギコギコギコ……。ギコギコギコ……。

「逃げるなよ！ 恥ずかしいとか、疲れてるとか、それが愛だとか！ 僕はアンタの言っていることが最近全然わかんないよ！」

アンタ、と言ってしまった。生まれて初めて、そう言った。

お母さんの手が、止まった。そしてしばらく、播り鉢の中を見つめていた。

「しばいたるか……」
「え？」

「子どものあんたに何がわかる？ デメンツの薬は、どんどん増やさんかったら効けへんねん！ 専門の先生がゆーてたわ。薬もアルコールもおなじや。人間、毒と薬にすぐ慣れるんや！」

お母さんは僕に播り鉢を投げつけた。鉢はかわしたけど、真っ白い粉が降りかかった。きつと僕はコントのオチみたいは、急になつているに違いない。粉まみれの僕を見てお母さんは、急に我に返つたようだ。

「きやーっ。やだ、光太。どうしよう！ 舐めたらダメ。その粉舐めたら絶対ダメ！ 危ない」
——ガッシャーン。

播り鉢が割れた音だった。割つたのは、いつのまにかそこに立っていたお父さんだ。そして、粉まみれになつた僕の顔を手が汗で湿っている。とても悲しそうな顔を動かした。ごめんなど謝り続けた。

「ごめんな、ええと……ええと、キミの名前は。キミの名前は。キミの名前は。」

*

2020年、春 尼崎市

〈前略、お父さん、お元気ですか。今、どこにいますか。何してますか。日本は今、大変なことになっていきます。新しい感染症が流行って、国は超自粛ムード。パンデミック。お父さんがいなくなつてすぐに、東日本大震災がありました、あのときと同じように、国中元気がありません。〉

僕はこの春、医学部3年生になります。いよいよ臨床医学の勉強が始まります。お母さんは、相変わらず訪問看護師で忙しそうです。横浜の病院の看護師をやめた後、お母さんと僕は尼崎のおばあちゃんの家に引っ越しました。神戸の近く

お母さんは呆然と、僕らを見ている。
「お父さん、僕だよ、光太だよ！ お父さんの息子の光太だよ！」

「……そやった。光太や」

僕の顔から白い粉を拭つたその手で、お父さんは自分の顔みれや。俺のせいで、俺のせいで。俺の。俺の。

「違うー」お母さんが、叫んだ。「ごめんはこっちや、私のせい。信太さん、本当にごめん。もうやめよう、薬やめよう。お父さんを小さな身体で抱き寄せた。親子三人、白い粉まみれになつて、泣いた。西日が暑かつた。

翌朝、目が覚めると、お父さんはいなかった。
お母さんはその日の午後、警察に捜索願を届け出た。徘徊間1万人近くが見つからないと言われて、お母さんはその場で泣き崩れた。

僕の小学校の卒業式の直前に、東日本大震災が起きた。たぐさんの人が、亡くなった。
お母さんは、震災をきっかけに、病院を辞めた。

にいたほうが、お父さんが見つかるかもしれない。お父さん、昔を思い出して帰っているかもって。あ、この話はもう、何度も書いてるよね。

お母さんは、在宅クリニックの訪問看護師という仕事が性に合ったみたいで、そこそこ元気でやっています。夜中もときどき、お看取りに出かけます。認知症になつても自宅まで期まで過ごしてもらうため私がいる、病院の看護とは世界がぜんぜん違うと言つて張り切っています。でも相変わらず、酒の方は……

とキーボードを打つたとき、スマホが鳴つた。母からだ。ラインやショートメールにしてくれと頼んでも、電話をかけなくなる。どうせしたい用ではない。今日は何が食べたいとか、お父さんにそっくりな人を見かけた、とか。

神酒クリニックで乾杯を

知念実希人



医療事故で働き場所を失った外科医の勝己は、知人の勧めで「神酒クリニック」で働くことに。ここでは院長の神酒章一郎を初め、腕は立つが曲者の医師達が、世間に知られることなくVIPの治療を行っていて……。

角川文庫

定価(本体600円+税)

「何？」僕はいつものように、ぶつきらぼうに出る。いつものようにテンション高めの母だが、なんだか今日は、ことさらの圧を感じる。

「光太？ 驚かないで聞いて。今ね、今、警察から電話があった！ お父さんかもしれない人が、静岡の高齢者施設にいた！」

「また？ もう、何回目だよ——やめてくれ、と思う。あれから10年だ。僕はもう、希望どころか溜息もでない。死亡が確認されない限り、葬式もできないから、行方不明者家族というのは永遠に心が宙ぶらりんのままだ。」

「光太！ 今度はガセネタちゃうで？ あんな、よう聞いてや！」

「はいはい。警察、なんだって？」

「今回の新型肺炎騒動で介護施設がほとんど閉鎖になつてやんか？ 閉鎖になつた施設からな、別の施設に移動になつた人が何人もおつてな。その施設、海が見えるらしい。熱海やで！ それで、記憶喪失だった男性が、海を見ていたら急に、僕の名前はクリハラシタロウだって、名前！ 名前ゆうたんやて！」

急に僕の鼓動が速くなる。マジか。でも、よくある名前と

いえばよくある名前で……。

「ここからや！ そのクリハラさん、絵が上手なんやて」

マジか。——だめだ、僕はもう、泣きそうだ。

「色鉛筆は12色あればいいってゆうて。その12色できょう、観覧車の絵を描いたんやて。夜の港の観覧車！ 小さな男の子と二人で乗ってる絵！」

「……………」

「ちよつと、聞いている？ 光太！」

スマホを耳にあてたまま、僕は目を閉じた。

瞼の裏で夜の観覧車が回っている。僕とお父さんは、観覧車から少し離れたベンチに座り、絵具をパレットに出して、スケッチブックに絵を描いていた。お父さんと過ごした、たった12年足らずの記憶が、たくさんのお父さんの色を伴って、限りなく海のようにどこまでも広がっていく……あの続きを。あの続きを、僕は描く。家族三人で。お父さんの記憶が、なくなつていても構わない。

その分、僕が覚えているから。

了

東京五輪で放たれた一発の銃弾。



東京五輪の開幕前、現役検事ながら馬術競技勸告代表のセリオンは、何者かに二度も襲われた。同じ頃、在日米軍女性将校と北朝鮮潜伏工作員の変死事件が相次いで発生。三つの事件の裏には、日米韓に関する謀略が蠢いていた——。

トリガー

真山仁

上・下

「このジャンルが書きたくて小説家になった。私たちがどんな世界に生きているか知ってほしい」——著者

大人気シリーズ「ハゲタカ」の真山仁
渾身の本格的謀略小説！

定価（本体各1500円＋税）上 ISBN978-4-04-105496-3 下 ISBN978-4-04-105499-4
電子版も「BOOK☆WALKER」（<https://bookwalker.jp>）など電子書店で購入できます。

KADOKAWA

KADOKAWA 公式サイト <https://www.kadokawa.co.jp/>

発行 株式会社 KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3 0570-002-301（ナビダイヤル）